

原子炉実験所だより

目次

1. 所長就任のご挨拶	1
2. 平成11年度共同利用研究（追加申請）の提出期限について	2
3. 「原子炉実験所共同利用掛」ホームページについて	2
4. 平成11年度の一般公開について	3
5. ゆとりを求めて（前田 豊）	4
6. 原子炉実験所の平成10年度出版物について	5
7. 外国人研究者講演会報告	6
8. 外国人研究員の受入れについて	8
9. 外国人共同研究者の受入れについて	8
10. 原子炉実験所運営委員会委員名簿	9
11. 原子炉実験所各種委員会委員名簿	10
12. 職員の異動	12
13. 委員会メモ（平成11年2月～平成11年4月）	16
編集後記	17

1. 所長就任のご挨拶

所長 井上 信

恩師であった木村毅一先生が原子炉実験所の初代所長になられる少し前、私が物理学科の学生であった頃、木村先生が敷地問題で苦労されていて、「四條畷の戦い」などといっておられたことをいま思い出しています。

その後、敷地も熊取町に決まり、建設が始まった頃、建築中の原子炉室の見学をさせていただきましたが、当時私は、やはり木村先生がそれ以前に作られた蹴上のサイクロトロンを使っての核物理の研究に興味があり、後に私が原子炉に縁があるようになるとは思っていませんでした。私はその後も阪大に移って核物理研究センターの設立に参画してAVFサイクロトロンの建設をし、さらに蹴上のサイクロトロンの研究室に戻ってそこを閉鎖して宇治地区に新しい加速器の研究室を建設するなどのことをやっておりました。

その一方で二号炉問題の行きづまりから、原子炉実験所の在り方が問われるようになり、京都大学総長の下に設置された原子炉実験所の在り方委員会や、学内の原子力研究整備委員会などにおいて、また原子炉実験所の審議員・運営委員として、原子炉実験所の運営と将来計画にかかわってきました。しかし、まさか自分が所長に任命されるとは、最後の決

定がなされるまで、考えていませんでした。今その任に当たり、責任を痛感しています。

現在の原子力研究を取り巻く情勢は、地球温暖化対策として原子力が見直されているとはいえ、決して順風満帆という状況ではありません。それに加えていわゆる国立大学の独立行政法人化など、国のシステムの大きな改革期を迎えています。単なる経済効果を追求するわけではない学術文化の拠点としての大学そして原子炉実験所としては、それが、国民にとって、地域にとって誇りとなりうる存在であると認められることによって、我々が税金を使って研究をすることを正当化できるのだと考えます。

目前に迫った使用済燃料の米国への返送を遺漏なく進めるとともに、将来へのビジョンを明確にし、各方面への理解を得つつ、自らは原子炉等の施設を安全に運転して国際的に評価されるような研究業績を挙げるということが、いまの我々のなすべきことだと思います。浅学非才の身ではありますが、私なりに最善を尽くしたいと思いますので、皆様方のご支援、ご鞭撻をたまわりますようお願いいたします。



2. 平成11年度共同利用研究（追加申請） の提出期限について

平成11年度の共同利用研究は、すでに公募採択済ですが、公募要項のとおり特に希望のある場合は下半期だけの「通常採択」について追加申請を受付けております。申請書類の提出期限及び送付先は次のとおりとなっておりますので、十分ご留意願います。

提出期限：イ）共同利用研究

平成11年6月4日（金）

ロ）臨界集合体実験装置共同利用研究

平成11年7月23日（金）

送付先：郵便番号 590-0494

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

共同利用掛

（封筒の表に「申請書在中」と朱記して下さい。）

なお、郵送の場合は必ず「書留便」または「簡易書留便」にして下さい。）

問い合わせ先（共同利用掛）

T E L 0724-51-2312 F A X 0724-51-2620

E-mail kyodo@postl.rri.kyoto-u.ac.jp

3. 「原子炉実験所共同利用掛」ホームページについて

共同利用掛では「原子炉実験所共同利用掛」のホームページで、KUR（研究炉）、KUCA（臨界集合体実験装置）、研究会の共同利用研究の公募要項、記載要領、申請書様式を公開しております。お手元のプリンターでA4用紙に印刷して申請に使用できますのでご利用ください。

なお、関連研究機関や研究者への郵送による配布も従来どおり行いますが、今後郵送が不要な場合は適宜共同利用掛までお知らせ下さい。

このホームページでは最近の「原子炉実験所だより」の目次、保安教育、宿泊所、近在のホテル、周辺の飲食店、バス時刻表等の情報も掲載していますので参考にしてください。

☆共同利用掛ホームページ <http://www-j.rri.kyoto-u.ac.jp/JRS/>

4. 平成11年度の一般公開について

平成11年度の一般公開を4月10日（土）午前10時から午後4時まで実施しました。大阪府下の公共施設に案内ポスターを送付するとともに、原子炉実験所ホームページを通して案内に努めました。また、和歌山放送ラジオ「泉南ホットライン」による原子炉実験所の一般公開の案内も行われました。しかし、今年は天候にめぐまれなかったこともあり、参加者は64名と昨年と比べて、低調でありました。ところが、雨にもかかわらず来られた方の中には非常に活発に質問をされ、臨界集合体棟での説明において1時間を費やすほどのグループもあったとのことでした。

今回、午前10時～午後4時まで事務棟会議室において「京大原子炉実験所紹介」「母と娘の日本測り歩き」「アトムへの旅」「からだの情報をとらえる」「電気の歴史」「くらしと放射線」のビデオが上映されました。また、同時に図書棟会議室で科学実験体験コーナーが催され、パソコンを使った科学実験体験、

稲妻球、発電機とモーター、衝突球そして霧箱などの実験を行いました。特に、日本原子力学会関西支部・原子力オープンスクールワーキンググループによる「放射線の足跡をみる」の霧箱実験は、参加者が霧箱の作製から始め、自らが作製した霧箱で放射線の軌跡を見るところすばらしいもので、ご指導された原子力オープンスクールの先生方のアイデアとご努力には頭の下がる思いでした。午後1時から前回と同様に臨界集合体、原子炉棟炉室、同棟ホットラボ施設そして廃棄物処理棟の公開を行いました。あいにく炉室は工事中のために入り口だけとなってしまいましたが、原子炉を身近に見た感慨を味わうことができたようです。さらに今回、ケーブルテレビ（テレコムりんくう、チャンネル9）からの取材も受け、原子炉実験所の一般公開に関して15分間番組として放映されることになりました。

（学術公開委員会）



5. ゆとりを求めて

前田 豊

京都大学を退職して1ヶ月が経った。慌ただしく退職を迎えたので、実験所員及び共同利用者の皆様にまともに挨拶もせず、失礼を致しました。改めて、長年にわたり皆様にお世話になったことに厚く感謝致したい。とくに、最後の4年間は皆様のご協力・ご支援を得て、曲がりなりにも実験所所長の任務を全うすることができ、現在ほっとさせてもらっています。

停年退官後は、あれもしよう、これもしようと楽しみに、色々と考えてきました。しかし、悠々自適の生活を送るにはまだ早過ぎるし、とくにこのところ忙しかったので余りにも落差がありすぎるのではと、4月よりとある私立大学にお世話になっています。私大の教官として全く「ゆとり」が無く、この1月は講義の準備に明け暮れました。講義ノートを準備するためこの1年は仕方ないと諦めているところです。原子炉実験所で学際研究をやらせて頂いたお陰で、今はその蓄えを利用して若者達に教育をできることに喜びを感じています。

先の学術講演会においても、40年にわたる放射線利用の研究をレビューする機会を与えて頂き、その際にも申し上げましたが、私の研究生活を振り返ってみると「ゆとり」をもって送れたことに感謝せずにはおれません。よき指導者、先輩、仲間に恵まれ、とくに専門分野の異なる方々に親しくして頂いたことが非常に幸運であったと思っています。原子炉実験所では、まだ時代が良かったせいか、当初は指導者の寛大なご理解のもと自由に研

究が行えたし、また他の分野の所員、共同利用研究者と夜遅くまで「だべる」場があって、多くのことを吸収する機会があり、自分を高めることができました。このような環境のもとで、私自身は学際研究に抵抗無く入っていくことができたと考えています。

昨今、行政改革の検討の中で大学自体のあり方が問われ、また部局、研究グループや研究者個人の自己点検・外部評価が盛んに行われています。そのような下では短期の間に形に現れる成果が求められることになり、一貫した研究が進められないことが危惧されます。また、研究テーマを思い切って変えることも非常に難しく、また学際的な研究を進めるにも相当な覚悟を要します。私の経験では、10年もすると研究は一応の節目を迎えることが多く、区切りをつけて新たな目標を立てることが必要になりました。その際、研究の新たな展開を求めるには、それなりの準備と余裕が必要で、物心にわたる「ゆとり」がなければできないと考えます。

この1、2年の間の中央省庁の統合、大学の在り方の検討の中で、実験所の今後の方向が問われることになりますが、学際領域にあり総合科学である原子力の基礎研究の分野では、是非とも「ゆとり」を持って研究が進められるように改革がなされることを切に望みます。私自身はゆとりのある生活に徐々に軟着陸したいと思っているこの頃です。

最後になりますが、皆様のご健康を心よりお祈り致しております。

6. 原子炉実験所の平成10年度出版物について

○原子炉実験所の研究活動及び共同利用研究報告、研究会報告等の出版物

1. 『KURRI Progress Report 1997』(目次)

I. RESEARCH ACTIVITY

1. Slow Neutron Physics and Neutron Scattering
2. Nuclear Physics and Nuclear Chemistry
3. Reactor Physics and Reactor Engineering
4. Material Science and Radiation Effects
5. Geochemistry and Environmental Science
6. Life Science and Medical Science
7. Neutron Capture Therapy
8. Neutron Radiography and Radiation Application
9. Waste and TRU management
10. Health Physics and Radiation Safety

II. ORGANIZATION

III. RESEARCH DIVISIONS AND LABORATORIES

IV. OPERATION AND DEVELOPMENT OF FACILITIES

V. RADIATION PROTECTION AND MONITORING

VI. PUBLICATIONS (APRIL 1997-MARCH 1998)

VII. MEETINGS, SEMINARS AND VISITING SCIENTISTS

VIII. COMMITTEE MEMBERS

2. KUR レポート (KURRI-KR)

粒子線の高度利用(Ⅱ)	1998	...	KURRI-KR-24
「不安定核の理工学及び核計測法(Ⅲ)」に関する専門研究会報告書	1998	...	KURRI-KR-25
ホウ素化合物の科学と ¹⁰ B中性子捕捉療法 第8、9、10回専門研究会報告書	1998	...	KURRI-KR-26
「中性子ラジオグラフィ技術の応用と実用化」専門研究会報告	1998	...	KURRI-KR-27
平成10年度「放射性廃棄物管理専門研究会」報告書	1998	...	KURRI-KR-28
平成10年度 核分裂への学際的アプローチ 専門研究会報告書	1998	...	KURRI-KR-29
「保健物理と放射能動態」及び「環境における水素同位体の化学形転換と動態モデル」	1998	...	KURRI-KR-30
「放射線および原子核をプローブとした物性研究」専門研究会報告(平成10年度) ..	1999	...	KURRI-KR-31
京都大学原子炉実験所「将来計画」短期研究会報告書 平成10年度会合	1999	...	KURRI-KR-32
第7回原子炉・放射線技術研修会	1999	...	KURRI-KR-33
平成10年度「アクチノイド元素の化学と工学」専門研究会報告書	1999	...	KURRI-KR-34

3. テクニカルレポート (KURRI-TR)

「冷中性子干渉実験とその応用(Ⅱ)」	1998	...	KURRI-TR-426
「遺伝子導入によるがん熱中性子捕捉療法の適応拡大」	1999	...	KURRI-TR-427

上記出版物を入手ご希望の方は、下記宛、ご請求下さい。

〔請求先〕 〒590-0494

大阪府泉南郡熊取町野田

京都大学原子炉実験所

出版委員会

7. 外国人研究者講演会報告

原子炉利用研究者グループの主催により、下記のとおり講演会が行われました。

○開催日時：平成11年1月25日（火）10：00～11：30

場 所：研究棟3階会議室

出席者：14人

講 師：オーストラリア メルボルン大学 アルベルト シミノ教授

演題及び講演概要： Measurement of the Aharonov-Casher Phase Shift by Neutron Interferometry

よく知られた Aharonov-Bohm(AB)によるトポロジカルな干渉効果は、1本の磁束管の周りを回折する電子の位相差に関連している。Aharonov-Casher(AC)効果は、電荷と磁気双極子の役割の交換可能性に基づいて、AB効果を磁気双極子をもつ中性子に拡張したものである。AC効果は一本の電荷線の周りを回折する偏極中性子の位相差としてあらわれる。この位相差は中性子の磁気モーメントと電場とのベクトル積によって与えられるが、そのポテンシャルは極めて小さく 10^5 V/cm の電場を仮定して 10^{-15} eV に過ぎない。したがって、AC位相差の測定のためには、できるだけ長い位相差を生じる実験空間（例えば、50cm以上）が必要である。

トポロジカルなAC効果の測定は、メルボルン大学の A.G.Klein 等によりシリコン中性子干渉計を用いて最初に行われた。しかし、この実験では実験空間の長さが2.5cmしか取れなかったため、予測された中性子分波間の位相差は、1.5mrad と小さく、信頼性のあるデータ取得は出来なかった。今、シリコン干渉計を改良してデータの信頼性をあげるべく準備中である。一方で、我々は KUR で開発された冷中性子スピン干渉実験に注目している。その理由は、位相差のための長い実験空間を得ることが出来ること、及び実験条件の維持が容易であるからである。AC効果による位相シフトの実証実験を行うためにスタートした KUR との共同研究に期待すること大である。

○開催日時：平成11年3月26日（金）13：30～15：30

場 所：研究棟3階会議室

出席者：11名

講 師：大韓民国 韓国原子力研究所 バン・ク・キム博士

演題及び講演概要： Structural Analysis for the HANARO Irradiation Capsule through Vibration Test

The instrumented capsule is subject to flow-induced vibration (FIV) due to the flow of

the primary coolant and then the structural integrity of the capsule during irradiation in the HANARO reactor is an issue of major concern. For this purpose the acceleration was measured by four accelerometers attached to the protection tube of the capsule. Based on the measured data, the displacement at the top part of the capsule main body and the displacement between flow tubes were calculated using commercial finite element program ANSYS to evaluate the structural interference with the neighboring flow tubes under the reactor operating condition. The calculated displacement at the region of the flow tube is found to be lower than the values of allowable design criteria.

講 師： 大韓民国 韓国原子力研究所 ヤン・ファン・カン博士

演題及び講演概要： Irradiation of Reactor Materials Using an Instrumented Capsule in HANARO

The first instrumented capsule (97M-01K) was designed, fabricated and successfully irradiated in the CT and IR2 test holes of HANARO. The purpose of the capsule was to evaluate the nuclear characteristics of the test holes and to obtain design data for nuclear reactor material capsule. There are 5 stages having specimens and independent electric heaters in the capsule main body. The temperatures of the capsule parts were controlled by He pressure in the capsule and heater power, and in-situ monitored through 12 thermocouples. Four sets of Fe-Ni and Al-Co Neutron Fluence Monitors were also inserted in the capsule to evaluate the thermal and fast neutron fluences.

The effects of reactor power, He pressure in the capsule, and heater power on the temperature of the specimens were investigated to get useful information for capsule design. During the test, the reactor power was increased by 5MW up to 20MW, and the He pressure and heaters in the capsule were varied in the range of 1~0.01atom and 0~117W/cm, respectively. The measured values are discussed and compared with the theoretical values obtained using computer programs of thermal calculation.

Based on the obtained results and experience, a new capsule will be designed for the irradiation of Korean reactor pressure vessel materials. In this presentation, several technical points in designing HANARO material capsules were also discussed to improve performance and capability of the developed capsule.

○開催日時： 平成11年4月28日(水) 15:00~17:00

場 所： CA棟会議室

出席者： 12名

講 師： 米国パーデュー大学原子力工学科 教授 石井 護博士

演題及び講演概要： 熱水力研究所における研究活動と気液二相流の客観的計測法に関する研究状況

はじめに、パーデュー大学原子力工学科原子炉熱水力安全研究所における研究活動の状況について説明があり、米国原子力規制委員会がスポンサーとなって進めているコード-2000の開発状況、次世代型炉であるS B W Rの熱水力設計に関連したP U M A計画などを中心とした研究開発の状況が紹介された。次に、現在、混相流研究で最先端の課題となっている界面輸送方程式に関して、多センサープローブによる界面濃度計測についての研究状況が紹介された。最後に、石油輸送パイプラインへの応用を目的とした気液二相流の客観的流動様式測定法としてニューラルネットワークを利用した計測法が紹介された。

8. 外国人研究員の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
Pazsit Imre (ハンガリー国・スウェーデン 国チャルマース工科大学教授)	中性子揺らぎと小さな 光ファイバー検出器の 応用に関する研究	平成11年3月15日～ 平成11年6月14日	核エネルギー基礎 研究部門 教授 代谷 誠治

9. 外国人共同研究者の受入れについて

氏 名	研 修 題 目	受 入 期 間	受 入 教 官
Cho Hyun-Je (大韓民国 ウルサン大学 非常勤講師)	ライナックを用いた中 性子断面積の実験的研 究	平成11年4月1日～ 平成12年3月30日	原子炉安全管理研究部門 助教授 小林 捷平
郭 玉君 (中華人民共和国 西安交 通大学動力・エネルギー工 学部助教授)	ポストD N B熱伝達に 関する研究	平成11年4月6日～ 平成12年2月5日	核エネルギー基礎 研究部門 教授 三島嘉一郎

10. 運営委員会委員名簿

平成11年4月1日現在
(順序不同)

北海道大学	大学院工学研究科	教授	榎戸武揚
東北大学	マイクロラジオアイソトープセンター	同	中村尚司
高エネルギー加速器研究機構	放射線科学センター	センター長	柴田徳思
名古屋大学	大学院工学研究科	教授	河出清
大阪大学	大学院基礎工学研究科	同	那須三郎
同	医学部	同	西村恒彦
同	大学院工学研究科	同	竹田敏一
九州大学	応用力学研究所	同	蔵元英一
広島国際大学	保健医療学部	同	竹味弘勝
京都大学	大学院医学研究科	同	小西淳二
同	大学院工学研究科	同	今西信嗣
同	大学院理学研究科	同	石黒武彦
同	原子炉実験所	同	宇津呂雄彦
同	同	同	小野公二
同	同	同	内海博司
同	同	同	森山裕丈
同	同	同	岩田豊
同	同	同	松山奉史
同	同	同	齊藤眞弘
同	同	同	工藤章
同	同	同	三島嘉一郎
同	同	同	柴田誠一
同	同	同	赤星光彦
同	同	同	福永俊晴
同		事務局長	黒川征

11. 原子炉実験所各種委員会委員名簿

研究計画委員会

平成11年4月16日現在
(順序不同)

委員長 委員	京都大学 高エネルギー加速器研究機構	原子炉実験所 放射線科学センター	教授 センター長	三島嘉一郎
	大阪大学	大学院工学研究科	教授	柴田徳思
	九州大学	応用力学研究所	同	竹田敏一
	京都大学	大学院工学研究科	同	蔵元英一
	同	原子炉実験所	同	今西山裕丈
	同	同	同	森山藤章
	同	同	同	工藤星光彦
	同	同	同	赤福永俊晴
	同	同	助教	瀬戸誠
	同	同	同	篠原厚

共同利用研究委員会

平成11年4月1日現在
(順序不同)

委員長 委員	京都大学	原子炉実験所	教授	赤星光彦
	東北大学	金属材料研究所附属材料試験炉利用施設	助教	三頭聰明
	東京大学	大学院農学生命科学研究科	同	中西友子
	名古屋大学	大学院工学研究科	教授	河出清治
	京都教育大学	教育学部	同	生島隆介
	大阪大学	大学院工学研究科	同	山中伸介
	九州大学	大学院理学研究科	助教	町田光男
	姫路工業大学	理学部	教授	小原孝夫
	若狭湾エネルギー研究センター	研究部加速器室	室長	大谷暢夫
	広島国際大学	保健医療学部	教授	竹味弘勝
	東京大学	大学院工学系研究科附属原子力工学研究施設	助教	上坂充雄
	日本原子力研究所	先端基礎研究センター中性子構造生物学研究室	室長	新村信郁
	京都大学	大学院工学研究科	講師	神野郁夫
	同	原子炉実験所	教授	宇津呂雄彦
	同	同	同	義家敏正
	同	同	同	齊藤眞弘
	同	同	助教	川野眞治
	同	同	同	山名元
	同	同	同	大久保嘉高
	同	同	同	増永慎一郎

臨界集合体実験装置共同利用研究委員会

平成11年4月1日現在
(順 序 不 同)

委員長	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	三 島 嘉一郎
委 員	北 海 道 大 学	大学院工学研究科	助 教 授	澤 村 晃 子
	大 阪 大 学	同	教 授	竹 田 敏 一
	同	同	助 教 授	山 本 敏 久
	武 蔵 工 業 大 学	原 子 力 研 究 所	教 授	金 子 義 彦
	日本原子力研究所東海研究所	燃料サイクル安全工学部	副主任研究員	須 崎 武 則
	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	森 山 裕 丈
	同	同	同	代 谷 誠 治
	同	同	助 教 授	三 澤 毅

原 子 炉 医 療 委 員 会

平成11年4月1日現在
(順 序 不 同)

委員長	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	小 野 公 二
委 員	同	大学院医学研究科	同	小 西 淳 二
	同	原 子 炉 実 験 所	同	内 海 博 司
	茨城県立医療大学	放射線技術科学科	同	稲 田 哲 雄
	国 立 舞 鶴 病 院		院 長	上 田 聖
	京 都 大 学	大学院医学研究科	教 授	平 岡 眞 寛
	同	同	同	宮 地 良 樹
	大 阪 大 学	医学部バイオメディカル教育研究センター	同	井 上 俊 彦
	同	医 学 部	講 師	平 吹 度 夫
	京 都 大 学	原 子 炉 実 験 所	教 授	齊 藤 眞 弘
	同	同	助 教 授	小 林 捷 平

12. 職員の異動

1. 退職

平成11年2月28日付け

原子炉安全管理研究部門

リサーチ・アシスタント

いし かわ まさ より
石 川 正 純

(任期满了)

中性子科学研究部門

リサーチ・アシスタント

やま ぎき だい
山 崎 大

(任期满了)

核エネルギー基礎研究部門

リサーチ・アシスタント

きた むら やす のり
北 村 康 則

(任期满了)

核エネルギー基礎研究部門

リサーチ・アシスタント

やなぎ た せい や
柳 田 誠 也

(任期满了)

応用原子核科学研究部門

リサーチ・アシスタント

はる き り え
春 木 理 恵

(任期满了)

平成11年3月30日付け

原子炉応用センター

事務補佐員

くわ はら きみ子
桑 原 キミ子

(任期满了)

平成11年3月31日付け

応用原子核科学研究部門

教 授

まえ だ ゆたか
前 田 豊

(停年退職)

中性子科学研究部門

助 手

お の まさ よし
小 野 正 義

(停年退職)

バックエンド工学研究部門

助 手

にし かわ さ たろう
西 川 佐太郎

(停年退職)

経理課用度掛長

事 務 官

み やけ まなぶ
三 宅 孝

(定年退職)

経理課機械掛

技 官

やま した しゅう じ
山 下 周 司

(定年退職)

経理課機械掛

技 官

ね ごろ とし はる
根 来 年 治

(定年退職)

応用原子核科学研究部門

教 授

いの うえ まこと
井 上 信

(任期满了)

核エネルギー基礎研究部門

客 員 教 授

ほし まさ はる
星 正 治

(広島大学原爆放射能医学研究所附属国際放射線情報センター 教授)

(任期满了)

核エネルギー基礎研究部門 (放射線医学総合研究所 主任研究官) (任期満了)	客員助教授	鈴 木 雅 雄 すず き まさ お
バックエンド工学研究部門 (任期満了)	技術補佐員	三 井 光 彦 みつ い みつ ひこ
バックエンド工学研究部門 (任期満了)	技術補佐員	齊 藤 幸 さい とう さち
放射線生命科学研究部門 (任期満了)	技術補佐員	藤 本 洋 子 ふじ もと よう こ
原子炉安全管理研究部門 (任期満了)	非常勤研究員	Chō Hyun-je ちょう ひゅん じえ
バックエンド工学研究部門 (任期満了)	非常勤研究員	陶 冠 紅 たお ぐん ほん
放射線生命科学研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	田 野 かおり た の
放射線生命科学研究部門 (任期満了)	研究支援推進員	荒 井 重 義 あら い しげ よし

2. 採用

平成11年4月1日付け

原子炉安全管理研究部門	助手	高 橋 知 之 たか ばし とも ゆき
中性子科学研究部門	助手	日 野 正 裕 ひ の まさ ひろ
応用原子核科学研究部門	助手	谷 垣 実 たに がき り
応用原子核科学研究部門	助手	北 尾 真 司 きた お しん し
核エネルギー基礎研究部門 (岡山大学臨床医学研究所細胞生理研究室 主任研究員)	客員教授	常 盤 孝 義 とき わ たか よし
核エネルギー基礎研究部門 (日本原子力研究所東海研究所中性子科学研究センター研究員)	客員助教授	曾 山 和 彦 そ やま かず ひこ
原子炉安全管理研究部門	事務補佐員	山 本 智 永 やま もと ち え
経理課機械掛	技能補佐員	山下 周 司 やま しん じ
経理課機械掛	技能補佐員	根 来 年 治 ね こ り ち
原子炉安全管理研究部門	非常勤研究員	高 宮 幸 一 たか みや こう いち
中性子科学研究部門	非常勤研究員	伊 藤 恵 司 い とう けい し
核エネルギー基礎研究部門	非常勤研究員	大 窪 秀 明 おお くぼ ひで あき
バックエンド工学研究部門	研究支援推進員	齊 藤 幸 さい とう さち

バックエンド工学研究部門
放射線生命科学研究部門
放射線生命科学研究部門

研究支援推進員
研究支援推進員
研究支援推進員

にし かわ き たらう
ふじ もと よう
おお やま 子
大 山 かおる

3. 昇 任

平成11年4月1日付け

総務課長

事 務 官

もり みつ たけ
森 光 毅

(工学部等総務課課長補佐より)

総務課共同利用掛長

事 務 官

よし ひら あつ お
吉 村 淳 郎

(化学研究所総務課庶務掛主任より)

経理課用度掛長

事 務 官

かつ べ つとむ
勝 部 方

(総合人間学部・人間・環境学研究科総務掛主任より)

経理課工営掛長

技 官

いけ だ あつ ひこ
池 田 敦 彦

(施設部建築課第三工営掛主任より)

経理課用度掛主任

事 務 官

あさ お ひで まさ
深 尾 秀 正

(同掛員より)

4. 配置換

平成11年4月1日付け

応用原子核科学研究部門

教 授

いの うえ まこと
井 上 信

(化学研究所附属原子核科学研究施設教授より)

総務課長

事 務 官

いし づか ゆき お
石 塚 幸 男

(数理解析研究所事務長へ)

総務課共同利用掛長

事 務 官

やま もと ひろし
山 本 博

(医学部附属病院医事課医事掛長へ)

経理課工営掛長

技 官

いし だ かつ ひさ
石 田 勝 久

(医学部施設掛長へ)

5. 転 出

平成11年4月1日付け

経理課長

事 務 官

もり もと かず ひこ
森 本 和 彦

(神戸大学経理部経理課長へ)

6. 転 入

平成11年4月1日付け

経理課長

(国立曽爾少年自然の家庶務課長より)

事 務 官 わたなべ ゆたか
渡 邊 裕

7. 併 任

平成11年4月1日付け

原子炉実験所長

教 授 いのうえ まこと
井 上 信



13. 委員会メモ

(平成11年2月～平成11年4月)

平成11年

- 2月4日 臨時原子炉安全委員会
- 2月8日 研究計画委員会将来計画小委員会
- 2月12日 臨界集合体実験装置共同利用研究委員会
- 2月19日 協議員会
- 2月26日 原子炉安全委員会
- 3月2日 地域広報活動委員会
- 3月8日 研究計画委員会将来計画小委員会
- 3月9日 研究計画委員会
- 3月19日 保健物理委員会
- 3月19日 臨時運営委員会
- 3月19日 協議員会
- 3月25日 臨時協議員会
- 3月26日 原子炉安全委員会
- 4月14日 研究計画委員会
- 4月16日 運営委員会
- 4月16日 研究計画委員会
- 4月19日 原子炉安全委員会
- 4月23日 協議員会



編 集 後 記

毎年3月から4月にかけては「移り変わり」が目に見えやすい時期であります。任期を満了された方があれば、新たに希望を持って参加される新人の方もあります。

今年はこのような状況に加えて、実験所の開所初期のころ以来、ほぼ30年ぶりに所外から所長を迎えることになりました。

ここ10年くらいは実験所でも所員の入れ替わりが積極的に行われてきたため、人的な変化に慣れてきていますが、今回のことは象徴的な変化を印象づけるものになったかと思います。

移り変わりは「世の常」とはよく耳にする言葉であります。常に改善の方向に向かうとは限らないことも世の常でありましょう。

また、甲殻動物など脱皮を必要とするものの最も危険な時期は、脱皮の瞬間であることもよく知られた事実であります。

古い殻を新しいものに変えることは、特に研究所のような職場では不可欠であり、また脱皮を繰り返してこそ社会の要請にも対応できるようになることにも異存のないところであります。

このようなことから移り変わる中での組織の活性を増す堅実な方法の一つは、古き良きものの活性をベースに新しいものを伸ばすことであると思われます。

勢いのある新しいものへの配慮に加えて、古き良きものの活性保持のためにも多くの配慮が望まれます。

このようなバランスの取れた配慮への感覚は、長くいる所員ほど敏感なようです。

近年、研究用中性子源として、原子炉から加速器に置き変わる流れが顕著となってきました。

この流れは、加速器の技術的な進歩にも裏打ちされて、実験所にもまた社会にも受け入れられているように思います。

「改善」という言葉は、「元のもの」の一部を良い方向に変えるという意味が一般的に込められており、全てを新しくすることは物事の連続性から考えてもあり得ないことであります。

実験所を真に社会に貢献できるものに改善して行くためには、今後一層多くの幅広い英知を結集する必要があると考えます。

編集担当者としてはこの実験所だよりも少しでもお役に立てればと願うものです。